



子育てに悩み、育児書を読んだりインターネットで教育関連のウェブサイトを眺めることがよくあります。様々な事例が見つかるのですが、結局のところキーワードはどれも「愛情」や「信頼」であるようです。もっとも信頼は愛情から派生するものであるとも考えられるので、子育ては愛情に尽きるということでしょうか。当たり前といえば当たり前なのですが、実践はそう簡単ではありません。頭では分かっている、愛情をはき違えるときもあれば、具体的にどう行動すればいいのか見当もつかないこともあります。

子どもは、親もしくは周りの大人たちから愛されていると感じることで自己肯定感が生まれ、それが自信につながり、また人間関係を構築する力につながっていくそうです。自己肯定感が必要なのは大人も同様です。気遣いや思いやり、大切にしたり感謝することも愛情の表れですが、親子関係だけでなく、夫婦、友人、職場での付き合い等、あらゆる間柄において互いに努力してそういった愛情を示さず、認め合い支えあうことをしなければ、その人間関係はうまくいかず悪化しかねません。

おおらかで慈しみ深い人の近くにいると、その愛情に包まれて心地よく過ごすことができるのは、誰でも経験済みではないでしょうか。見知らぬ人の微笑みにすら、思わず胸が温まることを考えると、愛情の色や形はまさに無数、場所や相手を問わず、与え、与えられるものだと実感します。私自身は思い通りにいかないといちいち苛立って不平不満がたまりやすい人間ですが、心に余裕を作る方法を実践し、愛情が愛情を呼ぶ環の中に身を置けたらと思わずにはられません。



今月号 内容

- ❧ 編集部より 2
- ❧ 英知の観点から、愛 3
- ❧ 心を知る：
アシュク（愛情、強烈な愛、有頂天の愛） ... 5
- ❧ 協議（シューラー） 7
- ❧ 預言者ムハンマドを語る：
教友たちにおける布教への熱意 11
- ❧ リサーレイヌールより：
13番めの光 13
- ❧ 映画から考える：
『流星』（原題：流星語） 16
- ❧ 祈りのある毎日へ 18
- ❧ 生活の道しるべ 18
- ❧ 裏切りのない愛 19
- ❧ レシピ コーナー：かんたんスコーン 20
- ❧ 原子で書く 21
- ❧ 地にある者の、天への愛情 24
- ❧ 我が主よ 27





英知の観点から、愛

愛とは、物質的、精神的な美・善への傾斜である。物質的なものへの愛は物質的、肉体的なものであり、精神的なものへの愛とは魂や良心によるものである。だから外見上の美しさへの愛は、その美しさが永遠ではないために別離の悲しさを伴うものとなる。精神的なものへの愛は永続的であり、別れの悲しさを伴わない。

「ある心において愛が真実なのであれば、敵意は^{けいしやう}形象にすぎず、敵意が真実なのであれば愛は形象にすぎない。」これは多くの問題を解決する、秘められた鍵である。

望まれていた喜びが手に入れられることは、その望みと同様、愛の死ともなる。望みと愛は、探し求める魂たちの翼であり、探し求めている限り彼らと共にある。

医者とは、病気の影響をその徴候によって知る。病人はそれを感じ、体感する。このように、愛する者は愛を、激しく愛する者は熱情を、熱愛に我を忘れた者は無我夢中の状態を、知のある者は魂の喜びを知る。（言葉ではなく）あり方によって得られる知とはこのことを言うのだ。

呪い

人という構造において、人にとって命に関わる重要性を持つ大事なポイントがいくつかあるように、民族という構造においても、信仰、歴史への認識、民族文化、そして民族の理想というような、とても大切なものがある。人にとって、命に関わるこれらのポイントの一つでもが打撃を受けるとよろめき倒れてしまうことが宿命であるように、民族にとってもこれらのうちのどれか一つが傷つくことによって崩壊してしまうことは確実である。民族の信仰と歴史をもてあそぶ者たちに千の呪いを！過去の敵たちに千の呪いを！民族の文化、民族の理想を蹂躪する者に千の呪いを！将来を暗闇と見なし、暗闇だと見せ付ける、希望を捨てた者、悲観主義者に千の呪いを！



西洋からの衝撃

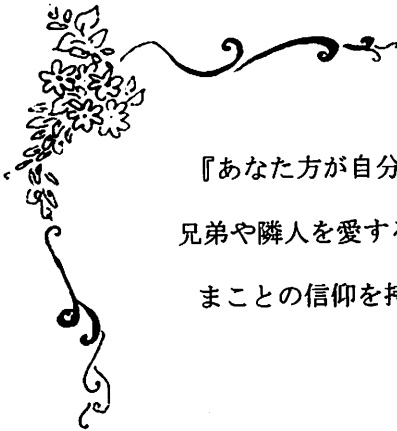
産業革命は、イスラーム世界に最初の衝撃を起こした出来事だった。ちょうどネコがネズミにショックを与え、そしてもてあそぶように、西洋もそれ以来イスラーム世界にショックを与え、そしてもてあそんでいるのである。

天国

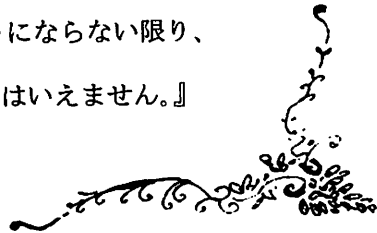
天国は、進歩する場所でもなければ後退する場所でもない。そこは喜びによって深められる場なのだ。

・ ..そして人は騙^{だま}された

私もしナリオを書くとしたら、最初の文章は「...そして人は騙された。」となっていただろう。



『あなた方が自分自身を愛するように、
兄弟や隣人を愛するようにならない限り、
まことの信仰を持つとはいえません。』





アシユク(愛情、強烈な愛、有頂天の愛)¹

アシユクとは、完全さや美、または身体的な魅力を好むこと、そして強く愛することを意味します。イスラーム神秘主義者たちは通常、この種の愛を、異性に対する愛のような、比喩的または隠喩的な愛だと見なしています。本物の愛、つまり不滅の統治者の愛は、かれの威厳の中に顕現するかれの優美さや美しさ、そしてかれの優美さや美しさの中に顕現する威厳に対して感じられるものです。アッラーに対して感じる真の強い愛は、人々がかれに到達するために使えるようにとアッラーから与えられた光の翼です。そうした愛を感じることは、存在の本質、光であられるお方に引き寄せられる蛾のような状態である魂だと表現することができます。この強い愛は、宇宙が創造された最も基本的で神秘的な要因です。アッラーは、知られ、愛されるため、そして真実に目覚めた魂がかれの本質、属性、また御名に対して深い興味を覚え、興味を示すようにと宇宙を創造されたのです。

アシユクは、魂が自由意志の介入なしに感じるものですが、その影響を非常に強く受けている人はそれをコントロールすることができません。なぜならその真の源は、ご自身の神聖なる特質に独自の方法でかれ自身を愛し、本質的に創造物から独立している存在であるアッラーであるからです。加えて、それは創造物がほかの創造物や創造主に対して感じる愛とは根本的に異なっています。この神聖な、アッラーのかれ自身や属性、御名に対する本質的な愛は、アッラーがこの宇宙を創造し、この世に人類を出現させた理由なのです。人類のアッラーとの関係における最も重要な中心として、アッラーの愛として人間の中に出現するのもこの愛です。

アシユクはアッラーに至る最終的な段階です。そしてそこに到達した人はそれ以上の段階に進むことはありません。アッラーは、かれがアッラーであることの必要性から、最初はこの神聖で本質的な愛として自身を顕現させました。この愛は、人が創造物や創造主に対して感じる愛と混同すべきではありません。他に表現に適した言葉が見つからないために、私はやむなく「愛」という言葉を使っているまでです。

一部で、このアッラーの最初の顕現は知識であると言い表されることがありますが、これはアッラーが知られるためにご自分を低くして振舞ってくれているのだと考えられます。この謙遜は次のようによばれます。「知識」はアッラーがご自身の知識を明らかにされること、また「神聖な愛」はアッラーの観察し観察されることを好むこと、「碑版」は全存在を包括もしくは包含すること、そして「筆」は存在するあらゆるものを細部に至るまで操作することです。ジャバルート(最高位にある、非物質の天)やアフマド(福音書の原本や天に記されている預言者の名前)の真理というのも、この謙遜もしくはアッラーの最初の顕現の別称といえるでしょう。

神聖なる愛はアッラーの本質に特有の神秘です。かれの他の属性はこの愛に付随するかもしくは依拠しているものです。この理由から、アシユクの翼によって飛翔する者が神の本質へと直接たどり着き驚嘆に到達す

¹ この文章が “Key Concepts in the Practice of Sufism” よりの訳です。

る一方で、その他の者は物質と御名の世界という中間領域を通過しなければならないのです。

アッラーへと至る道は無数と言っても過言ではありません。真実の科学であるイスラーム神秘主義には旅人がその旅程で必要とする食べ物や光、そして必需品が包含されており、(精神的な)教団(タリーカ)は彼らが旅立つための港、もしくは旅の指針が教授される学び舎であります。

真実なるお方に至る道筋は大きく二つのグループに分けられます。一つ目に、少なめに飲食し、少なめに眠り、熟考を増やし、不必要な社交を慎むといった指針について旅行者が教えをうけるという道があります。ほぼすべてのイスラーム神秘主義教団はこれらの実践に基づいています。求道者たちが唱える主な祈りは次の七つの名です。すなわち、「ラーイラーハイッラッラー(アッラーのほかには神はなし)」、「アッラー」、「フー(かれ)」、「ハック(真理なるお方)」、「ハイユ(永遠に生きるお方)」、「カイユーム(自存するお方)」、そして「カッハール(征服するお方)」です。これらの御名を唱えることによって、その者は現世の魂の七段階、すなわち「アンマーラ(悪を命令する魂)」、「ラウワーマ(自己批判する魂)」、「ムルハマ(靈感を受けた魂)」、「ムトマイナ(大悟した魂)」、「ラーディヤ(アッラーがどう扱おうとも十分に満足した魂)」、「マルディーヤ(アッラーが喜したまう魂)」、そして「サーフィヤもしくはザキーヤ(純化された、もしくは純真な魂)」を通り抜けようと模索します。上記の七つの御名にさらに「カーディル(全能のお方)」、「カウィー(強力なお方)」、「ジャッパール(強制するお方)」、「マーリク(所有するお方)」、「ワドゥード(愛を与えるお方)」といった威厳あるお方の名前を加える者もあります。また他にも、「ファルド(比較すべきものがないお方)」、「ワーヒド(唯一なるお方)」、「アハド(唯一無二のお方)」、「サマド(永遠なるお方)」といった恩寵の名前を加える場合もあります。

二つ目の道はクルアーンとスンナ(預言者の言行、範例)を厳守すること、そしてある一定の復唱を奨励することに基づいています。この道に従事する者は、行うことは何であろうとスンナに適合するよう邁進します。崇拝や祈願を行うのに、ある種の御名を唱えるよりもむしろ、アッラーの使徒が採った方法に従うのです。そしてアッラーがなされることや創造物について思い巡らしたり、アッラーの御名すべてを唱えたりします。シャリーア(イスラーム法)の命ずるところに極めて細心の注意を払って従いながらこうした活動に加わることによって、彼らは指導者や師と強固につながり、自分自身を捨て去りアシュクの潮流とアッラーへの(精神的)恍惚に身をゆだねるのです。

ひとたびアシュクと恍惚を獲得すると、存在とその外面的な特徴は彼らの視界から消え去ります。自我を消滅させ、完全なアッラーの唯一性を感じ、観察し始めます。ここに至って、彼らは混乱することなく、また創造主と創造物の関係において極端に走ることもなく、ただちに我に戻ります。このようにして彼らの旅は完結します。

この二つ目の道における基本的な指針は、日常的な崇拝、愛、アッラーに向かう精神的な恍惚感、アッラーを唱念すること、そして指導者や師との付き合いをもつことです。ここで唱念とは、アッラーのあらゆる御名を唱えることに加えて、何であれ人をアッラーに導く勉強や授業に参加することも含まれます。預言者(彼に祝福と平安あれ)が、アッラーに喜ばれる人々として「彼らは互いに学びあう」と述べたのはこのことなのです。

時に旅人は、いつの間にか情熱や思慕の流れに身をおいている場合がありますが、これもアシュクの別の側面と考えられます。





協議（シューラー）

協議（シューラー）を行うことは、初期の後継者となんら変わることなく現代の後継者たちに備わるべき重要な属性かつ不可欠なルールです。クルアーンによると、それが信仰をもつ共同体であることを示す最も明白な印であり、イスラームに心を捧げた信徒たちが有するこの上なく重要な特徴であるとのことです。協議の重要性については、クルアーンでサラート（礼拝）とインファーク（アッラーのご満悦を目的として、宗教と人々を支えるために施しをすること）に並んで位置づけられています。

「また主（の呼びかけ）に答えて礼拝の務めを守る者、互いに事を相談し合って行う者、われが授けたものから施す者」（相談章 38 節）

この節においては、協議が礼拝と同等に位置する行動の一種であることに気付かされます。神の言葉や神からの呼びかけに答え、受諾すること、その結果として行う礼拝や協議、施しが同一の命令の中で述べられているという事実によって、協議の重要性を指摘されているのです。

協議を重要視しない社会が十分に信仰を持った社会であるとは到底認められないこと、また協議を生かさない共同体が完全な意味でのムスリムとして受け入れがたいのはこうした理由からなのです。イスラームにおいて、協議は統治者と人民の双方が従うべき絶対不可欠な要素です。統治

者は政治や統制、立法、その他社会に関係するあらゆる物事に関して協議を行う責任があります。一方人民は、彼らの見解や思想を統治者に表明し伝える責任があります。

ここで注目すべき重要な点は以下の通りです。まず協議はどのような問題であれそこでなされる決定が成功するための第一条件です。特定の個人に関わるものであれ社会一般に及ぶものであれ、他者の見解や批判を考慮にいれず、十分に熟考されずになされた決定はどれも、大失態や損害、大きな失望のうちに終わっているのを我々は見てきました。たとえ優れた天性や際立った知性を備えた人であっても、自分自身の意見に満足して、他者の意見を尊重し柔軟に受け入れる姿勢がなければ、平均的な人よりも間違いを犯しやすいものです。互いに相談し検討すること（マシュワラートの）正当な価値を理解し尊重し、他者の知恵を借りることのできる人が最も賢い人なのです。計画や行為における自分自身の考えに満足し、さらには他人にまで自身の見解を取り入れるよう押し付けるような人々は、重要な原動力を見逃すのみならず、仲間との間に食い違いや敵意、嫌悪を生じさせかねません。

着手しようとする作業が最高の結果を出すための第一条件が協議であるのと同様に、自分ひとりだけの力をはるかに上回る大きな力の源を得

ることも、唯一協議を行うことによって可能となります。

何かしらの企てに着手するにあたっては、運命を呪ったり共同作業者を責めることにならないよう、また予防策のうちにとどまるよう、そして破綻や災難につながりかねない好ましからぬ行動や結果をもたらさないよう、必要な調べや事前の検討、協議を怠るべきではありません。結果や成り行きが入念に考え抜かれたものでなければ、そして企てに取り掛かる前にその分野における経験者の意見が参照されないようでは、失望や後悔は避けられません。十分な事前協議がなされないままでは事業や活動に着手したとしても成功しませんし、それに関わる人々は信頼を失ない落胆や失望を味わう羽目となるでしょう。

協議はイスラームの秩序をシステムとして成り立たせるための根本的な原動力の一つであります。個人と共同体、人民と国家、科学と知識、そして経済と社会学についての諸問題を解決するという最も重要な使命と義務を負っているのも協議です。もちろんこれは、それらの問題に関して明白な意味づけをするナッス（明文。クルアーンの節もしくは預言者からの命令で、宗教的な法規における何らかの点において決め手となるもの）がない場合において当てはまることであります。

イスラームにおいて、一国の協議委員会は指導的な立場にある機関で、執行部による決断が下される前に開催されます。今日、最高裁判所が設置されている国家もありますが、その機能はかなり限定され、審議のための付託事項は極めて範囲が狭く、イスラームの協議に比べると大幅に制約を受けた機関となっています。

国家の長および指導者は、仮に神の承認を受け啓示によって育成されたとしても、協議によって物事を進める義務を負っているのです。中にはこれを軽視した者たちもいましたが、名称や肩書きこそ違え、時代を通じてこうした機関を採用した国家や共同体は数知れません。実際、そうした機関を無視もしくは尊重しなかった社会は決して繁栄することはなく、滅びるのが常でした。それゆえ神の使徒は、彼の共同体の救済と発展を互いによる協議の中に見出したのでした。

「協議する者は決して迷わない」

協議についてクルアーンの中では二つの節において明白に言及されていますが、それを示唆する節はさらにたくさんあります。二つのうち一つ目はすでに挙げましたが、二つ目は以下のような何の解釈も必要としないものです。

「諸事にわたり、かれらと相談しなさい。」

（イムラーン家章159節）

一つ目の章において相談はキーワードであること、そして章自体が「アッ・シューラー（相談）」と名づけられ、真の信者たちから成る共同体を特徴付ける基本的原則の一つを説明していることの意義深さに注目すべきでしょう。

この章では、協議が教友たちの立派な属性として論じられています。「あらゆる行動を協議に基づいて行うこれらの者（教友）たちが称賛されずにいようか」と言わんばかりに注意を喚起させるものなのです。教友たちが数多くの属性の中でもとりわけ協議を行ったことによって褒め称えられていることは、その意義を示す重要な指標といえるでしょう。

協議が重要なルールとしてクルアーンで強調されていると同様、預言者の慣行（スンナ）の中でも相当の重きが置かれていること、そしてその重要性が繰り返し強調されているのを我々は目の当たりにすることができます。神の使徒は、天命が下されていない物事に関しては老若男女を問わず常に誰かに相談していました。我々は現在、あらゆる分野で進展しているかもしれませんが、協議については当時のレベルに達していると断言できないのではないのでしょうか。

神の使徒はあらゆる物事について教友たちに相談し彼らの意見や観点を取り入れ、ひいてはご自身が立案した企ては共同体の良心に提示され採用されたのでした。彼は基盤として共同体の良心から生じるあらゆる感覚、感情、意向を生かし、その延長に彼は開始された任務を後押しし、さらなる力と忍耐力を与えたのでした。すなわち、皆を一体化させ、皆を精神的にも霊的にも任務に巻き込むことによって、彼は任務の数々を最強かつ最も堅固な土台の上にやり遂げたのでした。

ここで、このことを説明するために預言者の生涯から例を挙げてみましょう。

ムスリム達がウフドに到着する前後、神の使徒は教友たちに相談し、一定の戦略にのっとり戦うよう指示しました。教友たちが間接的にも言外にも反対を示さなかった彼の戦略の中には、次のようなものがありました。丘の上の陣地に射手を配置すること。射手の敵との対峙の仕方と戦いで役割。いかなる事態に際しても持ち場を変えたり離れたりしてはいけないこと。勝利が明らかになった後で他の兵士たちが隊列を乱し、戦利品を追っていったとしても射手は持ち場を死守し

命令に従って他の兵士たちに追隨してはならないこと・・・

しかし、教友たちの一部は指揮に従うことの英知を理解していたにも関わらず、与えられた命令がどの時点から有効性を失うかについての解釈、判断において過ちを犯し、結果的に、ウフドに向かう道のりで神の使徒が直面した間接的な反対と同様の、間接的な反抗的態度をとることとなったのでした。もし誰かがこのように立て続けに反抗の態度をとられたとしたら、そしてその人が当時の場面と同じような損失や打撃を被ったとしたら、相手の人々やその提案を拒絶してこのように言うでしょう。

「あっちへ行け！神の罰があたるがいい。それが当然の報いだ。」

しかし、神の使徒はそのようにはしませんでした。教友たちの行動によってうかつにも敵前にさらされ、容赦ない攻撃を受けた結果、彼は負傷し顔は血まみれとなっていました。また教友や近い親戚たちのひどく損傷した死体に囲まれてもいました。仲間のうち幾人かは自らの命を心配して戦い、生き残るためにマディーナへと逃亡しました。このような状況にも関わらず神の使徒は周りにいた者たち—罪ある者でもそうでない者でも—に向かって何事もなかったように「諸事にわたり、かれらと相談しなさい」との節を朗誦し、その場に座って次に講じる手段について彼らと再度協議したのでした。彼はそこで助言を求めるのみならず、彼らが許されること、神からの啓示が下って彼らの許しを祈るよう命じられたことを告げたのでした。

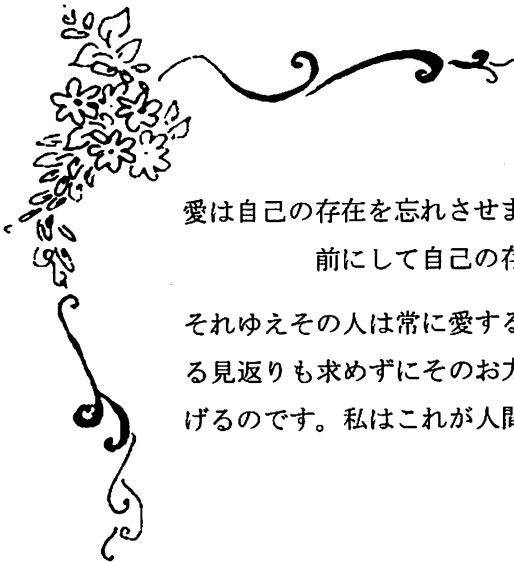
「あなたがかれらを優しくしたのは、アッラーの御恵みであった。あなたがもしも薄情で心が荒々しかったならば、かれらはあなたの周圀から離れ去ったであろう。だからかれら（の過失）を許し、かれらのために（アッラーの）御赦しを請いなさい。そして諸事にわたり、かれらと相談しなさい。いったん決ったならば、アッラーを信頼しなさい。本当にアッラーは信頼する者を愛でられる。」（イムラーン家章159節）

ウフドの戦いを受けてこの節が啓示されたとき、神の使徒は次のように述べたと伝えられています。

「実際は神も神の使徒も相談を必要とはし

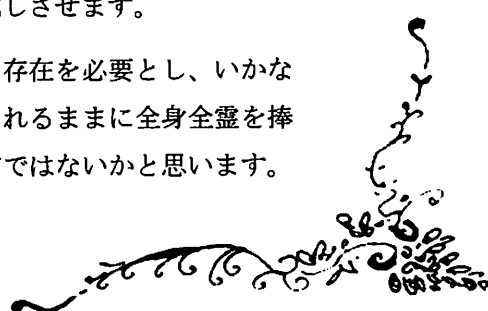
ません。しかし神はそれをかれの慈悲となさいました。誰でも協議をする者は正しい行いに達することを拒まれません。協議から離れる者は逸脱に陥るでしょう。」

実際には協議を必要としない使徒に神がそれを命じたように、統治者や管理者たちがそれを実践しなければいけないことは、この発言からもしっかり伝わってくるでしょう。統治者は独裁権を濫用するのではなく、一般市民の意見から恩恵を得るよう促されているのです。そして市民はこのようにして国家の運営に支援を行うことができます。



愛は自己の存在を忘れさせます。そして愛するお方の存在を前にして自己の存在を滅しさせます。

それゆえその人は常に愛するお方の存在を必要とし、いかなる見返りも求めずにそのお方が望まれるままに全身全霊を捧げるのです。私はこれが人間の本質ではないかと思えます。





教友たちにおける布教への熱意

ムスアブは、マッカの最も裕福な家庭の一人っ子であった。イスラームに入った時は17歳であった。彼は通りを行く娘たちを見るために窓に張り付き、彼女たちにハンカチを振るような少年だった。食べものや着るものにこだわりのある少年でもあった*。しかし、入信して以後は家族に受け入れてもらえなくなった。マディーナへ移った時には1枚きりの服以外何の持ち物も持っていなかった。それ以降も、常にそのように生きた。ウフドの戦いで殉教した時には全ての肉体をもアッラーに捧げたのであった。その日、彼はまな板の上で切り刻まれたかのように切りつけられていた。そして、それを包む布さえ見つけることができなかったのだ。†

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の教え子のこの幸運な教友は、マディーナに着くや否やすぐに教えを説き始めた。マディーナで、彼が訪れなかった家はなかった。親しみやすく、アッラーのために尽くそうとする精神の持ち主であったため、彼の説明を聞いた者は短時間で憎悪を捨て去りイスラームの輪に加わった。彼が来たことは、マディーナを活発化させた。彼はちょうど、暗闇の魂を明るく照らす光源であった。

アサド・ビン・ズラーデは彼の家主であった。彼はまだ金曜礼拝が義務とされる前に、しかも預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がマディーナに名誉を与えられるよりも前に、信仰する者たちを集めて金曜礼拝を行っていた。‡

マディーナに住む、有力者たちは皆、彼の家に来て、ムスアブの話聞いた。来る者は、来る時はいやいやであったが帰る時は人が変わったようになっているのであった。サアド・ビン・ムアーズもその一人だった。ムアーズもある時嫌悪感を持ちながらやって来た。そして、マディーナでは誰も反乱を起こしてはならないのだと言った。彼はムスアブのことをそのように理解していたのだ。そして、この反乱者を追い払う任務を持ってそこに来たのである。ムアーズは家に入った。ムスアブは親しい者たちに教えを説いているところであった。ムアーズは最初とても冷酷に振る舞っていた。ムスアブは彼に言った。

* Halid Muhammed Halid, Ricalun Havle'r-Rasul p42

† Bukhari, Jana'iz 28

‡ Ibn Hisham, Sirah 2/77

「まず、座って私の話を聞いてください。それが気に入らなければその手にしている刀で私を切ればいいでしょう。私はやり返したりはしませんよ」

この言葉はムアーズにとって十分だった。少し後には、自分自身を天使たちに会える段階にまで高められる扉をくぐり、心から信仰を受け入れたのであった。ムアーズはムスアブの前にひざまづき、ムスリムになったのだ^{*}。当時のマディーナにおいてムアーズの入信はマッカにおけるウマルの入信と同じような喜びをもたらした。その知らせはすぐに四方に伝えられた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が常に真実を説き続けたように、彼の誠実な弟子たちも同じように世界中に散らばって、真実を説くという任務を最も優れた形で果たそうと努めたのである。世界は、この光たちがもたらす、光に満ちた心によって明るくされるだろう。ムスアブをマディーナへ、タルハをドゥーマトル・ジャンダルへ、そしてベラーとハーリドをイエメンへと向かわせたものはこの思いと考えであった。

時として、教友が向かった土地で成果が上げられなければ、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼の行き先を変えられ、この交換は確かな効果を上げた。例として、ハーリド・ビン・アルワリードは派遣されたイエメンの地で、余り効果を上げることができなかった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそこへアリーを送られた。ハーリドは、ナジュランのキリスト教地区に送られた。ベラー・ビン・アジブは次のように語っている。

「ハーリドと共に、何日もイエメンにいたが、アリーが来る以前は誰も我々を信じず、我々に加わる者はなかった。しかし、アリーが来て何もかもが変わった。人々は次々にムスリムとなり始めた」[†]

イエメンでアリーは効果を上げた。なぜなら、彼は預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）と長いつきあいがあったからである。そしてハサンとフセインから続く輝かしい一族の父でもある。アリーが全イエメンを心に響くその言葉で制圧したことによって、後にマッカが征服された時その者たちは皆やって来てムスリムとなる結果を生むことになったのである。[‡]



^{*} Ibn Hisham, Sirah 2/78-79

[†] Ibn Kathir, al-Bidayah, 5/120-121

[‡] Ibn Kathir, al-Bidayah, 5/120-121



13 番めの光

7 番目のしるし

問い： ムーターズィラの学者達は害悪の創造を害悪の承認と捉えるため、不信仰と逸脱の創造はアッラーに帰さないと考える。それどころか、そのことによりアッラーを完全無欠で神聖なものとして捉える。「人間が自分自身の行動を創り上げる。」と言い、逸脱へと向かう。さらにこのようにも述べる。「大罪を犯した信仰者の信仰は失われる。アッラーを信じることと地獄へ向かうことは、そのような罪を犯すことと同時にしるしとげられない。というのは、この世でより小さな刑務所に入るという恐れから自分自身を法に触れる全てのことから守ろうとする。永遠の地獄の罰と創造主の憤怒を重要視せずに大罪を犯すならば、もちろん不信仰へと落ちていく。」と。

答え： 一番目の部分の答えはこのようである。天命についての便り（ガデル リサーレレル）において解説したように、害悪の創造は悪そのものではない。なぜなら、創造と発見はすべて結果として起こることである。ある害悪の存在は、数多くの善なる結果を招くために、その害悪の創造は結果に基づいて善となり、善とみなされる。たとえば、火の表面にも善なる結果が存在する。しかし、ある人々が悪面を創造しながら、火は彼ら自身に対して、害悪であるとしたとしても「火の発見は悪である。」とは言えない。そうであるならば、悪魔達の創造も、人間の発展にとって、非常に英知に満ちた善の結果を招くと共に、悪魔の創造、間違った行動によって、悪魔達に従うからと言って、「悪魔の創造は害悪である。」とは言えない。おそらく、彼は彼自身の行動によって彼自身に害をもたらしたのである。

そのように、行動もまた些細な努力であるために、個々人の害悪の結果として現れる。その行動による害悪もまた、害悪である。しかし、創造は多くの結果を見てみると、害悪の創造は害悪ではない。おそらく善である。このように、ムータズィラ派の人々は、この神意を理解しなかったため、「害悪の創造は害である。そして醜悪さの創造も醜悪である。」と真の主の神聖のために、害悪の創造を彼に帰さず、逸脱へと落ちてしまった。「善と悪もアッラーからという天命を信じる。」という信仰の簡条（カデル）を間違った方法で伝えたのである。

2 番目の部分、「大罪を犯すものは、どのように信仰者のまま存在しえるか？」という問いへの答えであるが、まず始めに以前の数々のしるしの中で、それらの間違いを確かな方法で知らせたので、繰り返

す必要は無いと思われる。

2番日に、人間の自我はすぐに与えられる用意された一滴から得る楽しみを、後に与えられる隠された大海より好むように、目の前に準備された平手打ちへの恐れを将来受ける1年間の罪よりも避けようとする。

さらに、人間の中で感情が勝てば、知性の判断に従うことはできない。欲望と妄想が支配し、最小で価値の無い準備された楽しみを、将来得るだろう大きな褒美よりも好み、選ぶ。そしてささいな目の前の困難を、将来後で与えられる多くの罪よりも避けようとする。なぜなら、妄想・欲望・感情は将来を見ることは無く、おそらく否定する。自我がそれに手助けをするならば、信仰の住む場所である心と知性は乾上^{ひあが}ってしまい、敗北する。このような状態では大罪を犯すことは不信仰によるものではない。おそらく感情と欲望と妄想の勝利による、知性と両親の敗北から起こるのであろう。

又、以前の数々のしるしによって理解されるように、悪と欲への道は破滅であるため、大変容易である。人間とジンのような悪魔はすばやく人間達をその道へと送り込む。これは大変驚くべき状況であり、明白な伝承によると、永遠の世界の一匹のハエの羽ほどの光は、永遠に続くため、人間が一生涯の中で、この世で得た甘美さと恵みに匹敵する。しかしその状況で、哀れな人間達は一匹のハエの羽ほどの些細なこの世のつかの間の甘美さを、この世界の全てに値する永遠の世界の甘美さよりも、より良いと選び、悪魔の後へと従っていく。

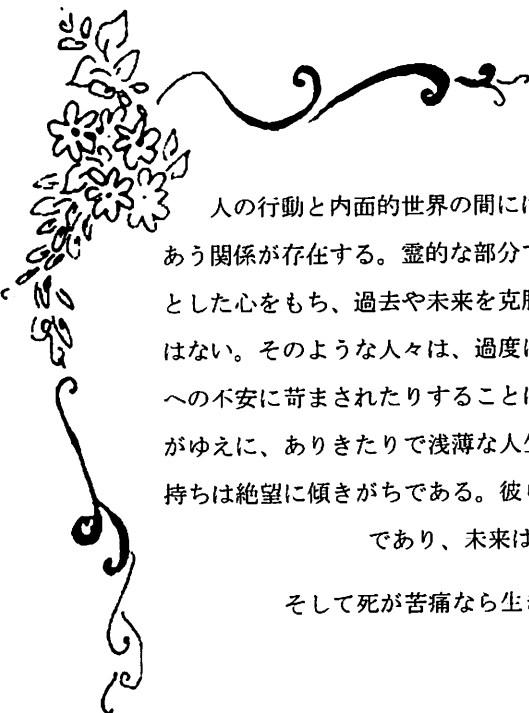
このような理由のため、英知なるクルアーンが繰り返し信仰者達へ強固に言及し、威嚇^{いかく}し、激励^{げきい}しながら、悪を避け善へ到達するよう導いている。

ある時、英知なるクルアーンのこれらの繰り返しによる厳しい御導きが、私にこのような考えをもたらした。それは、「これほど継続的な警告と注意は、信仰者達に、不動ではなく真実ではないものをしており、人間の尊厳には適さない状態である。」である。たとえば、ある役人が彼の長から命じられた1つの命に十分に従っているにも関わらず、同様の命令を10回伝えるならば、その役人は心から腹を立て「私に罪でも問いただしているのですか。私は反逆者ではありません。」というであろう。けれども最も純粋な信仰者達に英知なるクルアーンは何度も同じ事を繰り返し命じる。ちょうど、この考えが私の脳を悩ませていた時、私には2、3人の真の友達がいた。彼らが人間のような悪魔の罠にはめられないように、何度も警告と注意を私にしていた。かれらは、「私達をあなたは責めているのですか。」と言ったが、怒ることはなかった。しかし、この繰り返しする警告によって、私は彼らを怒らせてしまっている。そして彼らを不誠実さと不安定さによって私は責め立てていると私は懸命に伝えていたのである。

その後、突然以前の数々のしるしの中に言及され、明らかにされた真実を私は発見した。その時、その真実によって英知なるクルアーンはどの状況においても最も適した完全な方法で伝えられており、また、適切で無駄なく英知に満ち溢れ、責めることも無く強固に繰り返している。そして完全に役立ち、まさにその目的とその状況にふさわしい言葉が使われることを私は理解した。また、その真の友人達が怒らなかった真意を私は理解することができた。その真実の要約は次の通りである。

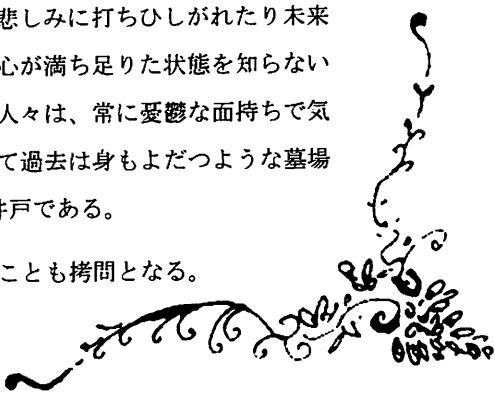
悪魔達は破滅という方向へ導こうとするために、少々の行動で数多くの害悪を成すことが可能である。そのために、真の道を歩む者達と正しい導きへと進む者たちは数多くの警戒と奥深い慎重さ、繰り返される警告と多くの支援が必要であるので、真の主は“繰り返す”という方法で1001の御名により信仰者達への援助を与えたまうのである。そして何千もの慈悲深き救いの手を差し出される。尊厳を壊すのではなく、守ろうとなさるのである。人間の価値を低められることはない。おそらく悪魔からの害悪を巨大に示される。

さて、真の信仰者の方々よ、そして正しい道に導かれるの方々よ、人間とジンのような悪魔の繰り返す畏から救われる方法は預言者のスンナとその方法から離れない者たちの真の学派に属しなさい。そして明白な奇跡のクルアーンの力強い城壁の中へお入りなさい。そしてスンナを道しるべとし、平安を見出しなさい。



人の行動と内面的世界の間には相互に補完しあい、かつ向上を促進しあう関係が存在する。霊的な部分で享受する生こそが真の生である。浚刺とした心を持ち、過去や未来を克服した人物は、時間の鎖に縛られることはない。そのような人々は、過度に過去の悲しみに打ちひしがれたり未来への不安に苛まされたりすることはない。心が満ち足りた状態を知らないがゆえに、ありきたりで浅薄な人生を送る人々は、常に憂鬱な面持ちで気持ちちは絶望に傾きがちである。彼らにとって過去は身もよだつような墓場であり、未来は底なし井戸である。

そして死が苦痛なら生き延びることも拷問となる。





『流星』（原題：流星語）

愛って何でしょう。愛情ってどんな感情でしょう。何となくのイメージは誰にでもあると思います。私が「愛」と聞いて思い出すのは、高校生のころ、小論文の授業でこのテーマが出された時のことです。この小論文の授業は、先生が毎回あるテーマを決め、それについて原稿用紙2〜3枚くらいで一本のエッセイを書くというもの。その第一回目の授業で、テーマからの発想と文章への展開の仕方、という説明で選ばれたのが「愛」。先生も大きなテーマを持ち出したものです。この言葉について何を思うかを聞かれ、私がこたえたのは「執着すること」でした。先生はもうちょっとメルヘンな答えを想像していたらしく、「…怖いねえ…」とって苦笑いでした。しかし、私にとって愛というと、今でもやっぱり「執着すること」を含んでいると思っています。

何かに対して愛情を抱く時、それはそれとどうしても一緒に過ごしたい、面倒をみたい、何かしたい（してあげたい）、という執着心、もっといえば欲のようなものと表裏一体なのではないでしょうか。そんな欲とは無縁の愛ももちろんありますが、物に対しても人に対しても、愛情と執着心はセットになっていると思います。なにかに愛情を注ぐとすると、それをいつも気にしてケアすることになり、それが無くなるのが嫌になる。これは当然のことでしょう。対象が人でも物でも、それは変わりません。

^{びんわん}敏腕証券マンのウェイは株の大暴落により一文無しに。家として使っているヨットへ戻ると、そこには「お金持ちに育ててほしい」と書いた紙をつけられた赤ん坊が。自分には無理だと、一度は道に置き去りにしたものの、やはり気になって拾いもどし、その子、ミンと暮らし始めて4年。ウェイにはかつての姿は無く、今は下町で何でも屋のようなその日暮らしの仕事をし、掘っ立て小屋に住んでいる。しかし近所の人々との暖かい関係の中に幸せを見出し、逆にみんなを勇気づけながら生きている。

その頃、ミンの実の母親であるリャンは事業がうまくいき、大富豪として子供のための慈善活動に励んでいるが、どうしても子供に対する恐怖心がぬぐえない。精神科医によれば、それはやはり捨てた子供のことが気になるからだという。しかし、ふとしたことでばったり出会ったミンだけは大丈夫だったことから、彼のことが気になり始める…。

チャップリンの名作「キッド」のリメイクですが、香港版「クレイマー・クレイマー」とも言える話です。と、いうと何となく話の落ちをつかんだ方も多いかと思いますが、そう、最終的には子供は誰が育てるかという話になるのです。法律的にも、物理的にも全く血のつながりのないウェイではなく、リヤ

ンになるのが当然の流れなのでしょう。しかし、観客の立場から言わせてもらうと、「冗談じゃない!!」。やっぱり母親じゃないとダメだ、面倒をみきれない、子供が幸せにならないというのは理屈に合わないように思えます。4年間、ミンとウェイは楽しく幸せに暮らしてきたわけだし、いくら実母とはいえ、赤ん坊を死んでもいいくらいの気持ちで捨てた人に母性を語る資格はないとも思います。しかし、そこもまた難しい所で、人の心は変わるもの。いくら子供を捨てたからとはいえ、後悔していないとも限りません。やり直したいと思っているかもしれません。リャンもそうであったと言えなくもないでしょう。しかし子供を必死に探すわけでもなく、子供向けの慈善活動という微妙な活動で償いをした気になっているところをみると、その辺りはこの話の中では少し曖昧です。とはいえ、リャンは唯一苦手意識を持たずに接することのできるミンが自分の子供だとわかると、何が何でも絶対に手に入れないと気が済みません。

こうなると、それは愛情からなのかそれとも単なるエゴなのか、なんなんだかわからなくなってきます。愛情と執着心はセットになっている!という私の持論のもとでは、これも立派な愛情だ!ということになるのですが、さすがの私もここには自己満足の匂いを強く感じます。「より良い」愛情には、やはり相手のことを深く思いやる心も必要なもの。執着心とセットの愛情は自分でもなかなか手に負えなくなるものですが、思いやりとセットの愛情は、もっと広く大きな心と安心感を与えてくれると思います。愛情は持ちながらも執着心を弱めて、相手にとって何が最良と思われるのか、ということを考え、話あうことも大事なのでしょう。そう考えると、ウェイはミンに対しても、周りの人々に対しても、深い思いやりと愛情を持ち、それゆえ皆に愛されています。そしてその愛情を注いだものが離れていく時・離れなくてはならない時、どう判断するのか、どう対処するのか、といったところでも、大きな心でそれを受け入れます。

果たして実の母と育ての父(物理的には父ではないですが)、どちらと暮らしたほうが子供のためになるのか、どちらが幸せなのかは周囲の判断できることではありませんし、白黒キツリつけられるものでもありません。話の展開上、どうせならリャンとウェイは結婚したらいいじゃないかとも思うのですが、それも難しいようです。話は分かりやすく起伏に富んでいるのですが、納得しきれないところもたくさんあります。それゆえ、見ながらあれこれと自分で考える余地もある映画なのだと思いますね。

愛情を持って接しているものと離れなくてはならない時、あなたならどうしますか?

『流星』 1999年 香港 111分

監督: ジェイコブ・C・L・チャン 製作: レスリー・チャン

出演: レスリー・チャン(ウェイ) / エリクソン・イップ(ミン) / キーキー(リャン) 他

主題歌: 「小明星」 レスリー・チャン





ドウア（祈り）のある毎日へ

何ものにも負けることのない勝利者

何ものにも作られることのない整形者

何ものにも造られることのない創造者

何ものにも従うことのない支配者

何ものにも強いられない征服者

何ものも到達しえない威厳者

何ものにも守られる必要のない守護者

何ものにも助けられる必要のない援助者

何ものにも知り得ない幽玄の証言者

何ものよりも万物に近い者

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、

あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄の炎からお助け下さい。⁸



生活の道しるべ

「いかなるもべてあれ(いかなる人であっても)私とその家族、財産、あるいは、全人類よりも愛するようにならない限りイスラームの信仰者とはいえない。」



「魂は徴兵された軍隊である。ゆえにお互いに良く知り合えばそれより強く結ばれることになる。|か|お互いに反発|あえば|バラバラに離れてしまうものです。」



「一人の男がアッラーの使徒の所にやって来て次のように尋ねました。アッラーの使徒よ、ある男が人々を愛していますが彼の行爲や行動は人々のそれとは一致しない場合にあなたはどうお考えですか?そこでアッラーの使徒は”人は彼が愛する者と共に居るものです”と言った。」

⁸ジャウシャン・カビール（偉大なる鎖帷子、アッラーの美しい御名と属性を知らせるお祈り）には、祈願、唱念、救いを望むことが記されています。ジャウシャン・カビールのアラビア語/日本語訳オーディオ CD・ROM またはプラスチックカバー本は出ています。詳細は：<http://www.isuramu.com/shopping>

「人に愛されるようになるための10ヶ条」、「こうして私は愛される人になる！」――

こんなタイトルの雑誌や本は現代では驚くほどに溢れています。

人々が愛について知りたい、愛が永遠のテーマであるのはいつの時代も変わらないようです。「愛」についての本や雑誌が爆発的に売れる背景に、マニュアルに頼らないと人を愛せない、愛され方がわからないといった悲しい現実が見えてきます。家族、子供、友人・・・

対象は様々ですが、自分勝手な愛情を押し付けて相手を振り回している事に気づかない、相手から思っ
たように愛を感じないからと憤慨する・・・。このような現実、最近の事件な
どからも分かるように、周囲の人々や家族への無関心さと愛するより愛されたい
という過度な自己愛によって歪曲化^{かいまが}してきているように思います。



「愛」とは、「愛する」とはどういうことなのでしょう。年齢的にはとっく
に大人の仲間入りをしているので、私は当然理解しているとずっと思ってきましたが、イスラームに出会っ
て何に対してそのような自信を持っていたのかと恥ずかしい気持ちになりました。そして、本当の意味を私
は知らなかったのだと認めざるを得ませんでした。例えば、「私は家族や子供を愛しています」ということが、
一般的には、当然の発言だとしても、私は感情を抑えるよりも、自分勝手な感情の起伏によって周囲を犠牲に
している言動をとっていると反省することが度々あるのです。また、周囲に無関心でいれる自身が愛情の薄
い人間であることを認めることにも自我が邪魔をし難しいと感じてしまいます。

ある時、友人が「自我を感じる時にこそ、アッラーのご満悦のために、アッラーがお喜びになるために、
と思えば何でもできる気持ちになれるよ。」と教えてくれました。この友人が言うようにアッラーを信じ、お
喜びになられるよう、アッラーゆえに全ての行動をおこすということが、私達の世俗的な感覚、自我を正しい
方向へと導き、周囲への愛情を豊かにするということにつながっていくのだと思います。

アッラーは罪をおこす私達に、存在するための命と過不足ないお恵みを与えて下り、そしてそれは永
遠です。このようなアッラーの愛に包まれて、とても暖かく、ふわふわと浮かんでいるような心地よさ。私
はムスリムとなって、アッラーを愛するということに長い間ピンときませんでしたし、やはり目の前のことば
かりに捉われてしまい、現在も十分ではありません。しかし、このような裏切らぎりのない、心底安らぐ感
覚は、私がムスリムにならずにいたら、きっと私の人生には訪れなかったでしょう。そして、その対象を誰
かや何かにして依存し、満足できずにいたでしょう。

アッラーが私達を十分に愛してくださっているということにもっと感謝し、片時も忘れないようにし

ないといけないと思いました。そして、アッラーがお喜びになられるよう、アッラーゆえに生きるアッラーへの愛をもっと深いものとし、私達自身、家族、子供、社会へと広げていく役割を担っていかないとはいけません。それには、自分自身をもっとアッラーを愛している証明を行動とし、まず近い家族や子供に愛を持って接することができるように、そして周囲へと広げていけるように。そしてまたアッラーへの愛としてお返しできるようになりたいと思います。

「あなたは見ないのか。アッラーは地上の凡てのものをあなたがたに従わせ、かれの命令によって、船を海上に走らせられる。また天をかれの御許しなく地上に落ちないように支えられる。本当にアッラーは人間に、優しく慈悲を垂れられる御方である。」(聖クルアーン 巡礼章第 65 節)



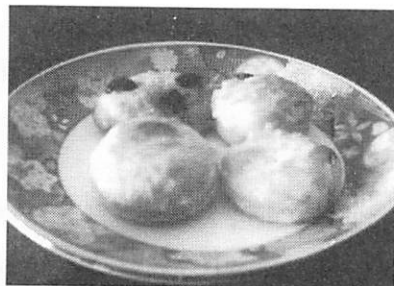
レシピコーナー

かんたんスコーン

材料: バター 85グラム 小麦粉 240グラム
牛乳 100ミリリットル 砂糖 30グラム 卵黄 1個

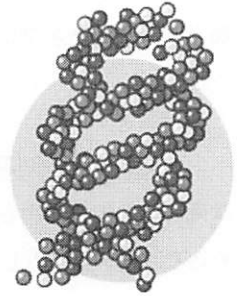
作り方:

- ☞ ボールに小麦粉、ベーキングパウダーと砂糖を入れる
 - ☞ そこに常温に置いていたバターを入れ、さらさらになるまで手で混ぜる。そこに卵黄と牛乳を入れて混ぜる。
 - ☞ ラップに生地を入れて包み、冷蔵庫で2時間休ませる。
 - ☞ 休ませたら、台に小麦粉を引きそこに生地を置き棒であつさ4センチぐらいにのばす
 - ☞ 後は好みの形に切ってオープン皿に載せる
 - ☞ 上に卵黄を塗り180度で25分ぐらい焼く
- *生地に、干し葡萄やチョコチップを入れてもおいしいよ





時折、私たちは間違った判断をする。小さな物を造る際の芸術性や英知の方が、大きな物を造る際のものよりもより容易なものである、という考えである。サイド・ヌルシ師はそのような想定がどれほど根拠のないものかを、例をあげて説いている。一つの原子の上にかかれた書物は、空に星を使って書かれた書物よりもなお、注目すべきものである。小さなものの芸術性には、より優れた技術と知識が要求されるのだ。だから私たちは、針の頭に祈りの言葉を書いたり、米粒にクルアーンの章句や他の何らかの言葉を書いたりする人の話を聞いて驚くのだ。原子に、一つの書物を複写することは可能だろうか？



科学者のグループがまさにこのことを企画した。彼らは書くための道具として、鉛筆よりもむしろ集束電子光線を用いた。リヴァプール大学の一部の研究者は、二つの原子の幅よりも太くない線がひける電源を開発した。それらの線は非常に細いものであり、それらの線を何百万と重ねても、最も細い鉛筆書きの線の内側に収まってしまうほどだった。そのような線をひくことが、誰かが手作業で行なうことができるものでないことは明らかである。最もわずかな振動ですら、線が重なってしまう原因となる。この作業を成功させる唯一の手段が、電子光線をコンピューターで送ることである。

4兆の原子が針先に相当するといえ、そしてそれが1ミリほどの正方形と等しいといえ、私たちは原子がいかに小さなものであるかを理解できるだろう。もし、縦横10個ずつ、計100個の原子の正方形をつくっていくなら、針先だけで400億の正方形ができるだろう。まず私たちはこの正方形の一つに文字を入れていく。いくつかの正方形は文字と文字の間のスペースとして空白のまま残していく。一つの言葉に平均6つの文字が使われるとするなら、私たちはその正方形のうち280億個を満たすために47億個の言葉を使用することが出来る。ブリタニカ大百科事典には訳5000万の言葉が載せられている。これまで、百科事典を針の先だけにおさめるのは不可能と思われてきたが、実は針先の1パーセントを用いるだけでそれができるとわかったのである。もし全ての文字を10倍の大きさで書いたとしても、それはまだ十分針先におさまるのだ。針の先というのはなんと巨大な空間だろう。彼らの理論が成立するかどうか確認するため、リヴァプール大学の研究者たちは百科事典の1ページを針先におさめたのだ。

針先に百科事典を記すことが何になるのかと疑問に思う人がいるかもしれない。私たちはそれを読むことができないのだし、そんなものはただの無駄な課題ではないだろうか？

将来、技術は新たな発展を遂げるかもしれない。しかし今のところ私たちは、これらの技術を、神によって創造された芸術作品を鑑賞するために用いることができる、という例をあげる。原子が文字として使われる『書物』の素晴らしい例の一つは、染色体の細胞の中にある。全能の神は、その力というペンで、生物のDNAの中にコード化されたそのプログラムと特徴を書かれるのだ。人ゲノム⁹のプロジェクトによって、私たちは染色体の中の遺伝子を読むことができるようになった。この発展は、小さな宇宙である人間の、生物学的な神秘と特徴に多くの光を投じるものとなった。



これほどの知識がどのようにDNAの中に織り込まれるのだろうか？DNA分子は染色体の中で見出される。そしてそれは、細胞核にクロマチン（染色質）という形で詰め込まれている。もしDNA分子が折りたたまれておらず、それぞれの部分を並べていくとしたらそれは6メートルにも及ぶ。このような長いDNAの中にどれほどたくさんの原子が含まれているかを理解するためには、次の例が助けとなるだろう。もし、7500万個の水素原子を並べていくと、それは1センチの長さの水素の鎖となるのだ。一つ一つの染色体は6メートルの長さに達するものであり、そして一つの細胞には46の染色体が入っていることから考えると、たった一つの細胞の中に詰め込まれている染色体の長さはほぼ300メートルとなる。ここで、リヴァプール大の研究者によって電子光線で書かれた、二つの原子の幅を持つ線を思い出してみよう。その線は、鉛筆で書かれた線の百万分の一の細さである。そして折りたたまれた状態になっているDNAの鎖がいかにか小さいものであるかをイメージしてみよう。これは、小さな宇宙と呼ばれる人間を、1センチの10万分の1、または100万分の1の染色体に圧縮することを意味するのだ。もちろんこの奇跡的なわざは、原子と呼ばれる生命も意識も持たない存在が行なったものではなく、また偶然の賜物でもない。これは、そのみわざの全てが奇跡であり、その力が無限である神が行なわれたことなのだ。

一つの原子の上のクルアーン

クルアーンを一つの原子の上に記すことは可能だろうか？原子は目に見えないほど小さなものであり、原子をよりよくとらえるため、そして問題をよりわかりやすくするために、ここでは地球ほどの大きさのりんごについて考えてみよう。全てのものがそうであるように、りんごもまた原子によってできている。りん

⁹人の体を構成する細胞の1つ1つには、体を間違えなく作りあげ、刻々に変化する外界に対処しながら生活を営み、子孫を作り、やがて死に至る、一切の遺伝情報が担われています。これをゲノムと呼びます。この情報を担うのはDNAと呼ばれるヒモ状の超高分子物質です。

ごが地球サイズだとすると、その原子の大きさはボールほどとなる。しかしそれでも私たちは、中性子と陽子を含む原子の核を見ることはできない。核と電子の間のスペースは、私たちの使っている基準では膨大なものとなる。この電子の半径は、電子と核の間の距離の10万分の1である。この電子を半径1センチのおはじきと想像するなら、核はおはじきから1000メートル離れていることになるのである。ここで核の大きさをフットボールほどのものとするなら、最も小さい原子、例えば水素原子でも、2000メートルの半径を持つ球体となる。

この場合、私たちは何回、クラーンを書けるだろうか。私たちはおはじきほどの大きさの電子、もしくは電子の1836倍の大きさを持つ中性子や陽子を文字として使う。このような巨大な球体の表面には、10回でも100回でもクラーンを書くことができるだろう。これらの例に関して留意すべき重要なポイントの一つは、原子はほとんど空洞である、ということである。もし原子を核で満たそうとするなら、1015もの核が必要となる。もしその球体の表面だけではなく、原子核を文字として使って内部とその空洞にもクラーンを書くのであれば、一冊につき30万620個の言葉を持つクラーンが何千回も書ける。

驚くべき類似性

一人の人は100兆もの細胞を持っている。一方で、人間に関する科学的な知識は、ほんの一つの細胞に納められることができる。しかしほんの一つの細胞に何が含まれているかという観点からは、人間はどのような偉大な書物よりもなお深遠しんえんなものである。もし細胞に意識があれば、それは自らが人間という存在のインデックスであることに驚くであろう。ちょうど私たちが、自分自身が宇宙のインデックスであるという概念に驚くように。

一人の人間は、一つの原子の1028倍大きい。そして太陽は人間の1028倍大きい。これが偶然であるはずがない。人間と原子、そして太陽の間になんらかのつながりがあるに違いないのではないだろうか？

この世界は太陽系の中の一つの点に過ぎない。一人の人間もまた、宇宙の中の一つの点のようである。宇宙として知られるこの神の書をまとめる時、この宇宙という書物の所有者は、それを人間に要約された。そして人間についてまとめる時、そのお方はゲノムと呼ばれる原子で書かれた小さな本に要約されたのである。

崇高なる創造主が、原子のシステムと似た形で太陽系のシステムを創られた、というのは興味深い事実である。これは宇宙の創造主と人間の創造主が同じであることを示している。このお方は、私たちにその芸術性について考えさせ、またその美に驚嘆させるため、太陽やその他の複雑なシステム、そして原子のような球体を創造されたのである。





クリストフ・コロンブスの前にアメリカを出現させた運命は、私の前に私自身を出現させた。しかし私は見つけられなかった…。皆、宝である。皆、秘法を探し求める探検家である。宝も彼自身であり、秘法を求める探検家もまた彼自身である。外で探し求める者も、中で探し求める者も、自らを探しているのだ。

前者はユヌス（ユヌス・エムレ）、後者はメヴラーナ。二人とも、おそらくはある御方を求めているのだ。コロンブスがアメリカで自らを発見できていたら、彼は真の人間となっていただろう。自らの中で金鉱を探し求める人。その場合にはもしかしたら名声や名誉はなかったかもしれないが、しかし真の人間になっていただろう。そう、二つの仕事を共に成功させることができているならば、つまりアメリカを見つめるのと共に、自らをも見出していれば、二つの角のある、二つの次元にいたる王になっていただろう。

コロンブスの前にアメリカを出現させた運命は、私の前に私自身を出現させた、と述べた。しかし私は、発見されるのを待っている大陸だったのだろうか？ありえないことではあるが、一つの大陸のような人であったなら、私の大地には金の粉ですらも存在したのだろうか？私が一つ的大海であったら、私の中の深いところではたった一つの真珠であれ見出されたのだろうか？そしてこれまで、誰が誰を見つけてきたことだろうか。皆、自分を見つめる道の徒弟なのだ。それ以外は偽りである。神を知ることについて彼らは語る。自分たちを知っていると彼らは思っている。これはただの主張であり、その証明は彼方の場で行なわれる。どの言葉も、何もかも全て仮定である。この世界は妄想と疑念、懐疑、疑惑の世である。しかし、天から地への呼びかけは？そう、それは別である。もちろん。

皆、自分が知ってもらえないことに不満を言う。知るのは誰であろうか？そのような包括的な力は誰にあるのか？誰も、他者を完全に知ることは出来ない。そのような力は持つてはいないのだ。さらには自らを知ること。そして創造主を知ること。40年連れ添った配偶者ですら他人である。「この世で私のことをよく知っているのはあなたなのに、あなたも私を誤解している。」この言葉を言う人は、地平線の彼方に到達することのない天才か、あるいは典型的な狂人であろう。知られたらどうなるというのだろうか。それすら明らかではない。私たちが知ろうと知るまいと何が変わるのだろうか。あなたのおかげで世界が変われるというのだろうか。来世が開かれるというのだろうか。それどころではないだろう。あなたはまず自らを救ってみなさい。あなたがすがった腕のことをあなたは知らない。その腕の主のことも。誰が誰を知ることが出来たというのだろうか。ここは見知らぬ人々の世である。皆、たがいに見知らぬ他人なのだ。そして自分に対しても、万物に対しても。何よりもまず、創造主に対して。それならば、なぜ不満を述べ

るのだろう。

「人々が私を分かってくれないと悲しむことはもうやめた。私の人々を知っていないと悲しむことにしたのだ。」と孔子は語った。それ以上の何があるだろう。人が、他者ではなく、自分を知ることができないということに悲しむこと以上に。そう、ここに、皆を知るということの暗号がある。そして皆によって知られることの秘密が。それがなければ何の価値もない。知られること、理解されること、見出されること、あとをつけてこられること、誰かに支持されること、誉められること、天に高められること、天にあること、天を支配すること、そして崇拝されること、という希望。こういった思いには果てがなく、終わりが見えない。よそ者であると感じること、孤独を感じることは人間の問題である。生命を持つ全ての被造物の問題ではない。その処方箋は、天の彼方の神秘の碑銘にある。

『読め、「創造なされる御方、あなたの主の御名において。』（聖クルアーン 凝血章第1節）

そして読まれるべき最初の本は、人間そのものなのだ。人というものを読むことができる者は、そこにおけるアッラーの美名への知識によって、そのお方の特性をすることができる。要約的にはあってもそのお方を知る人は、万物に対しよそ者だという感覚を抱かなくなる。全てが愛らしく、愛すべき存在であることを知り、感じる。ただし、無知はそれでも姿を消さない。この無知というものは、水平方向かつ垂直方向の多くの圧力を共にもたらすことがある。無知と不義は双子の兄弟なのだ。

「本当に（人間は）不義でありかつ無知である。」（聖クルアーン 部族連合章第72節）

誰も、不義であり、無知であることは望まない。それにもかかわらず、不義と無知とに縁のない人間など見当たらない。いつでも共にあるこの二つの特質と並び、よそ者と感じること、そして孤独であることは、様々な現象の中で、それを必要とする理由がある、といえるかもしれない。

「自らを知る者は主をも知る。」これはハディースとされる言葉である。まさにそのとおりである。しかし、よそ者である感覚を自分から引き剥がすことができない人が、主に対するその感覚をどうできるだろう。自らについても限られたことしか知ることのできない人間が、創造主についても非常に狭い範囲でしか知ることができないのは当然のことである。知るということに先立って、意志、努力、熟考、そして崇拝行為が求められることは明らかである。従って主に対するしもべとしての行為を行なわない人が真実から得ることのできるものも、それに比例する形で部分的となる。真実の知は、それを得た者に、現世と来世における幸福をもたらす。そう、幸福をもたらすのだ。なぜなら知ることは愛情を、愛情は従うことを、従うことは真実を、そして真実は二つの世界での幸福を求めるからである。

私が何になることを望んでいるか？人間。私はそう言った。彼は驚いた。冗談だと思って笑った。しかし私は彼のことを驚かなかった。私は冗談を言ったのでもなかったし、笑いもしなかった。私たちはそれぞれが俳優のようだった。彼が笑い、私は考え込んだ。誰が成功者で、誰が幸福なのだろうか？笑う者だろうか、考える者だろうか。笑い、かつ考えること、おそらくそれが最善だ。誰かがこう言うかも知れない。なぜだというのだろうか？なぜなら、私は一人の人間だからである。私は人間として生まれたのだ。人間としてあり続け、人間として死んでいくものとしなければいけないのだ。そうではないだろうか？笑うことも考えることでもなく、多分私は、(できなかつたとしても)泣くことに一票を投じる。人が、人であるために泣くことに関しては、完全な想念は、完全さへ変わっていくものである。完全に手に入れないものでも、完全に放棄されることはない。


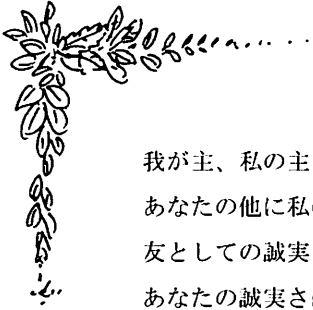
人間であることを望む者は、人間性を失ったこと、あるいは進歩の無限さにおいて完全ではないことに不満を述べる。そう、私自身に対し私は不満を持つ。自我、私という私の鍵で、万物の宝庫に到達できなかったために。私の魂の深いところから、天へ上昇することができなかつたために。私の本質の中にある天使たちの世界に対し開かれ、個々のミラーージュによって天国のシドラの樹にまで高められることができなかつたために。高められ、そして崇高なるお方の御前に至ることができなかつたために。私がノックしてきた扉はどれも^{しんきょう}蟹気楼だったのだ。空想だったのだ。全ての満たされなかつた思いと共に、私はあなたの御前に至る。救いを失った者の救い、最も秘められた御方よ！

私は私の心に対し不満を持っているのです。思い焦がれる者の胸に心を備えられた御方、愛する御方よ、あなたは私の胸に岩を置かれたのではないのです。私は知っています。信じているのです。四方に分散した私の心、傷ついた魂、ばらばらになった私の思いを、いつ、一つにまとめていただけるのですか。そしていつ、私の全てであなたに向かえるのでしょうか、慈しみ深い御方、ご自身への愛を培われる御方よ！いつ、私は自分自身から救われ、あなたの方へと向かうことができるのでしょうか？



私は全ての思慕と共にあなたの愛のもとに来ました。あなたのご満悦のもとに来ました。最も美しい御方、最も愛されるべきお方よ…





我が主よ

我が主、私の主よ

あなたの他に私の主はおりません！

友としての誠実さをあなたにこそまいります。

あなたの誠実さは余りあるほどです、私の主よ！

あなたの扉の前に侍るしもべたち、
皆々の求めるもの、それはあなたです。
しきりのとばりを取りのぞき下さい、
そして、美しい主を見出せますように。

知り尽くせない属性を知らしめる御方

万物を覆い尽くすあなたの玉座

見つめる者たちはあなたを見出し、

盲目の者たちへは、ご自身を隠される我が主よ、

あなたを心に留めたと申す者たちはあざむかれ、
あなたを心に留めぬ者達は叫び、なげきます。
私の心に、深く、あなたは留められました。
熱愛する者たちに讃えられる我が主よ。

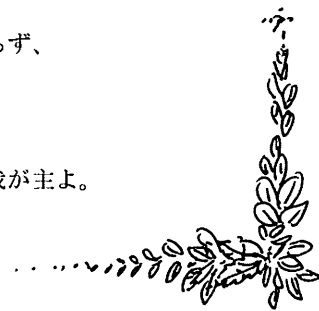

あなたの御名は魂たちにとって光そのもの、


あなたを思うことが、腹心の友たちにとって安らぎ、

あなたは賢者たちの終着駅、

苦しむ者たちへの癒してあられる我が主よ。

私の罪は数多く、あなたに従うこともままならず、
私の最後の時は刻々と近づいています。
あなたがお救い下さらぬのなら、
どなたから慈悲を授かる事ができましょう、我が主よ。





愛とは、物質的、精神的な美・善への傾斜である。
物質的なものへの愛は物質的、肉体的なものであり、
精神的なものへの愛とは魂や良心によるものである。

だから外見上の美しさへの愛は、
その美しさが永遠ではないために別離の悲しさを伴うものとなる。
精神的なものへの愛は永続的であり、別れの悲しさを伴わない。

定期購読 国内: 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

定期購読 国外: 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

バックナンバーや1年分の総集編もございますので、お気軽にお問い合わせ下さい。

郵便振替口座番号: 00100-6-354012 口座名義: 月刊誌やすらぎ

三菱東京UFJ銀行 店番号: 630(春日部) 口座番号: 1134374 口座名義: 月刊誌やすらぎ

皆様のご意見、ご感想、ご質問を心よりお待ちしております。
「やすらぎ」編集部

<http://www.yasuragiweb.com>
info@yasuragiweb.com
yasuragi_nihon@hotmail.com

〒156-0045 東京都世田谷区桜上水3丁目24-4、203
156-0045, Tokyo-to, Setagaya-ku, Sakurajousui, 3-24-4-203, JAPAN